

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：13401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580005

研究課題名(和文)被災地における「哲学的対話実践」の理論的基礎付けと展開

研究課題名(英文) Theoretical Underpinnings and Evolvement of "philosophical practice" through Dialogue in Disaster-affected Areas

研究代表者

西村 高宏 (Nishimura, Takahiro)

福井大学・学術研究院医学系部門・准教授

研究者番号：00423161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまで被災地で行なってきた「哲学的対話実践」の意義を「哲学プラクティス」の文脈の中で理論的に基礎付ける作業を行なうとともに、その「哲学的対話実践」の批判的検証を行なった。具体的には、海外の「哲学カウンセリング」や「哲学プラクティス」の最新の文献を丁寧に分析し、被災地で行なってきた「哲学的対話実践」の活動の意味を理論的に基礎づける作業について一定の成果を得ることができた。また、「てつがくカフェ」を仙台市内を中心に30回、その他の地域で18回、全体で48回開催し、予想以上の成果を得た。さらに関連学会などで成果発表およびWSを企画開催し、多くの参加者とともに貴重な対話の場をひらいた。

研究成果の概要(英文)：This research discussed the "philosophical practice" through dialogue that is occurring at the philosophy cafe in disaster-affected areas. It also touches on the current trend in "philosophical practice" that has been developed since the 1980s as a new paradigm in philosophy by Western philosophers such as Gerd Achenback.

We have experienced numerous separations and deaths since the earthquake. We are currently being forced to question anew various values including our views on life and death, such as love, conscience, kindness, loyalty, and fairness, that we had developed comfortably in tranquility. In such circumstances, the "philosophical practice" that is occurring at the philosophical cafe; where the participants' words (ideas) are strengthened through dialogues with others may be needed. It was only in such circumstances may it be possible to examine whether "philosophical practice" can play a major role in crisis management after the earthquake.

研究分野：臨床哲学

キーワード：哲学的対話実践 東日本大震災 哲学カフェ 臨床哲学 哲学プラクティス 医療専門職 看護

### 1. 研究開始当初の背景

東日本大震災の被災地では、死生観の問い直しも含めて、今まさに、震災によって「(苦境の中にいる人たちの) 乱れた生活の平衡状態を回復する」ために「哲学を実際の生活へと繋げる」必要がある。具体的には「哲学カフェ」などの哲学的対話実践をとおして、「対話の参加者が、いま自分が置かれている困難な状況についての個々の解釈（「世界観解釈」と呼ばれる）を『声に出す』ことができる場」を拓き、参加者たちが「問題となっている当面の苦境についての単純素朴な理解から、共感をもって他者の考えを聴き、質問し、自己と他の参加者による批判的評価を通じて新しい言葉遣いの確立（自分の考えを逞しくする作業）」を支援することが求められている。

震災以降、被災地である仙台市と協力して開催してきた「哲学カフェ」（西村高宏〔研究代表者〕主宰）や「東日本大震災を〈考える〉ナースの会」（近田真美子〔研究分担者〕主宰）もこのような問題意識のもとで開始した。そこでは、「被災者の痛みを理解することは可能か」など、今回の震災が私たちに突き付けてきた困難な問題を参加者と相談しながら毎回テーマとして設定し、100名近くの参加者（被災者の方々）とともに、あるいは被災地の支援に携わってこられた医療者の方々とともに哲学的な対話を積極的に重ねてきた。この試みは、震災以降、多くの重要な成果を残してきたが、他方で、そのような実践のなかにあって、被災地における哲学的対話実践に対するこれほどまでの高いニーズの〈根拠〉がどこにあるのか、その理論的な基礎づけが不明確なままであった。そこで、今後、被災地における哲学的（対話）実践を行うためのモデルを提案、作成するためにも、そのための実証的・理論的な基礎づけの作業の必要性を痛切に感じ、今回の研究を思い至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) 近年、欧米を中心に「哲学の新しいパラダイム」として展開されつつある「哲学的実践」の最新の動向を調査・研究し、これまで体系的なカタチで日本国内に紹介されてこなかった「哲学的実践」の原理および方法論を積極的に紹介すること、(2) またそこでの研究成果をもとに、2011年以降、仙台市教育委員会と連携しながら東日本大震災の被災地でおこなってきた、「哲学的実践」の一形態である「哲学カフェ」という「対話実践」についての批判的検証を試み、被災地における「哲学的対話実践」の具体的なモデルとその可能性を提案することである。この実践は、震災時、とくに看護などの医療専門職領域において大きなニーズがあったことから、(3) 専門職における哲学的対話実践の可能性についても具体的な成果を明示する。

### 3. 研究の方法

研究の具体的な方法は、以下の主な2つの研究課題に応えるなかで、それぞれに展開した。

#### 【研究課題1】

「哲学的（対話）実践」に関する文献研究およびフィールドワーク調査（被災地）。

#### 【研究課題2】

被災地での哲学的対話実践（「てつがくカフェ」「東日本大震災を〈考える〉ナースの会」）の実施およびその批判的検証。

#### 〈研究方法〉

- ・「哲学的（対話）実践」に関する最新の文献を取り寄せ、分析し、体系化する。
- ・フィールドワーク研究については、フランスでの対話実践の最新の動向を調査し、現地の研究者たちとの研究連携および意見交換を積極的に行う。
- ・被災地における「哲学的対話実践」に関するインタビュー調査およびデータ収集などを積極的に行い、被災地での「哲学的対話実践」の可能性を実証的なデータをもとに分析する。
- ・以上の成果をもとに、最終年度では、被災地における「哲学的対話実践」のモデル構築へと繋げていく準備をおこなう。あわせて、分析した結果を、国内外での学会発表にて積極的に紹介する。

### 4. 研究成果

本研究では、これまで被災地で行なってきた「哲学的対話実践」の意義を、1980年代以降、欧米を中心に新たに展開されつつある「哲学プラクティス」の文脈の中で理論的に基礎付ける作業を行なうとともに、その「哲学的対話実践」の批判的検証を行なった。

具体的には、海外の「哲学カウンセリング」や「哲学プラクティス」の最新の文献を丁寧に分析し、被災地で行なってきた「哲学的対話実践」の活動の意味を理論的に基礎づける作業について一定の成果を得ることができた。その成果の一部は、2015年に海外の学術誌で発表した論文のなかで提示した。

たとえば、そこでは「哲学カウンセリング」の問題意識や手法が極めて有効であることが明らかになった。その第一人者である Ran Lahav (Haifa University, Israel) は、「哲学カウンセリング」などの「哲学的実践」には「世界観解釈 (worldview interpretation)」といった中心的な役割が担われていると考えており、被災地での哲学的対話実践も、この「世界観解釈」をいかにほぐしていけるかが重要な切り口であることが実践からも裏付けられた。

ラハブの説明によれば、「世界観」とは「生活の諸々の出来事を組織し分析し分類し、パターンに注意し注釈し、そこに含まれる意味を引き出し、意味を理解する幾つかの仕方のひとつ」とされる。そして、「哲学的実践(家)」

は「世界観解釈のエキスパート」として、今回の震災などによって著しく綻んでしまった震災以降の「世界観」を新たに繕いなおすために、それに関わる人びとが「自分の生き方のうちで表現されるさまざまな意味を明らかにし」、「意味・目的の岐路」や「空虚といった感情」、さらには「人間関係をめぐる困難」や「不安」などといった「苦境」の根が何処にあるのかを「批判的に吟味」できるようにする、いわゆる「座標系 (system of coordinates)」を提供するものとして解釈されていると言える。これを、バウケ・サイルストラ (Bauke Zijlstra) の言葉で説明しなおせば、そのような「哲学的実践」の試みは「(苦境の中にいる人たちの) 乱れた平衡状態 (disturbed equilibrium) すなわち乱れた生活の平衡と、人生についての思考の乱れにおける平衡とをともに回復すること」ということになる。

さらに、われわれが着目した思想家はアネット・プリンス・バックター (Prins-Bakker, Anette) という哲学プラクティショナーであった。とくに、彼女の論文“Philosophy in Marriage Counseling.”のなかで述べられている「問題と自分の同一 (identification)」の視点には様々な示唆を受けた。

彼女の視点に倣って言えば、われわれは「問題」を通して世界を観るので、まずはその「問題」から「自分自身を分離する」ことから始める必要がある。そして、さらにそれを丁寧にみんなが共有できるような「問い」に仕上げようとする営みが「てつがくカフェ」ではないか。

彼女は、実践の中で、彼女が「同一視の問題」と呼ぶものに出会ったという。この言葉で彼女が言おうとしているのは、クライアントが自分自身を問題と同一視する～すなわち、問題にどっぷり取り込まれてしまっているために、問題はもはやその生活の一面にすぎないのではなく、「彼らの存在全体を占拠するまでに増大してしまっている」～ということである。つまり、そこでは単に彼らが「問題を持っている」のではなく、逆に「問題」が彼らを完全に支配してしまっているのである。本研究では、被災地での「哲学的対話実践」の理論的基礎付けの作業をこのような切り口をもとに練り上げていくことができた。

また、被災地での哲学的な対話実践の可能性について批判的に検証するために、いわゆる「てつがくカフェ」と呼ばれる哲学的対話実践を、東日本大震災の被災地である仙台市を中心に計 30 回、その他、福島や山形、盛岡、東京、神戸などの地域で 18 回開催し、全体で 48 回もの哲学対話実践を行なった。それらをおして多くの実践資料を得ることができ、予想以上の成果であった

さらに、そこでの成果を応用哲学会や日本

災害看護学会などの関連する学会などで発表、もしくは WS を企画開催し、多くの参加者とともに貴重な対話の場を開いた。これらの成果をもとに、今後の研究の新たな切り口も得ることができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①「原子力災害時における専門職の役割を問う：不安の軽減と信頼の構築」

近田真美子

『精神医療』第 4 次(84), 批評者,  
p. 101-107, 2016. 査読無

②Is the Earthquake Disaster Trying  
Philosophy? :An Attempt of  
"Philosophical practice" in the  
Disaster-struck Areas.

Takahiro Nishimura

The Formosan Journal of Medical Humanities  
15, 16. p. 37-52, 2015. 査読無

[学会発表] (計 4 件)

①WS「てつがくカフェ『熊本地震から考える  
『被災者に寄り添う支援とは』」

西村高宏 近田真美子

日本災害看護学会 2016 年 8 月 26 日 久留米  
シティプラザ (福岡県久留米市)

②「こころのケアを再考する～被災地における  
哲学的対話実践の試み」

近田真美子 西村高宏

日本精神保健看護学会 2016 年 7 月 3 日  
びわ湖ホール・ピアザ淡海 (滋賀県大津市)

③「震災を〈見る〉?～被災地における『哲  
学的対話実践』の可能性」

西村高宏 近田真美子

応用哲学会 2016 年 5 月 8 日 慶応大学三田  
キャンパス (東京都港区)

④WS「てつがくカフェ『震災と専門職を問い  
直す』」

西村高宏 近田真美子

日本災害看護学会 2015 年 8 月 9 日 仙台国  
際センター (宮城県仙台市)

[図書] (計 2 件)

①『てつがくカフェ〈ふるさと〉を失う?』  
(せんだいメディアテーク スタジオ協働プ  
ロジェクト 2016)

西村高宏 せんだいメディアテーク

p. 3-25. 2016 年

②鷲田清一編『哲学カフェのつくりかた』（共著）

担当執筆箇所：「震災のなかで／について、考える～被災地で〈対話の場〉を拓く」

西村高宏 大阪大学出版会 p. 165-194.

2014 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

・てつがくカフェ@せんだい HP

<http://tetsugaku.masa-mune.jp/index.html>

・せんだいメディアテーク「考えるテーブル」

HP

<http://table.smt.jp/?p=4097>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 高宏 (NISHIMURA TAKAHIRO)

福井大学・学術研究院医学系部門・准教授

研究者番号：00423161

(2) 研究分担者

近田 真美子 (MAMIKO KONDA)

東北福祉大学・健康科学部・講師

研究者番号：00453283

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )